

研究資料

第12回 ICCE グローバルコーチカンファレンス開催の意義と価値
Meaning and value of hosting the 12th ICCE Global Coach Conference

久保田潤^{1),2)}, 和久貴洋^{1),2)}, 勝田隆^{1),2)}
Jun Kubota^{1),2)}, Takahiro Waku^{1),2)}, Takashi Katsuta^{1),2)}

Abstract : The purpose of this study was to examine the meaning and value of hosting the ICCE Global Coach Conference in 2019 from the participation status of the ICCE Global Coach Conference in 2015 (GCC2015), 2017 (GCC2017), and 2019 (GCC2019), and the results of an online questionnaire from GCC2019. The number of sessions, presentations, participating countries/regions, and participants of the three conferences were analyzed based on the event details, programs, and participant lists published at each conference. Furthermore, a quantitative text analysis was implemented using KH Coder 3 on the open-ended question's responses regarding the positive aspects of the GCC2019. There were 460 participants from 39 countries/regions in the GCC2019, which were higher than those of the GCC2015 and GCC2017. In particular, the number of participations from Asia and Oceania countries/regions increased. In GCC2019 5naire, about 80% of the respondents highly evaluated the conference in general, and acknowledged that the GCC2019 was meaningful for their own activities. The co-occurrence network analysis suggested that GCC2019 was a place where impactful ideas were discussed and shared. In addition, venue and operation of the event seemed to be of high interest to the participants of GCC2019. The results of this study suggested that GCC 2019 had provided participants with opportunities for self-directed and interactive learning, which led to a positive evaluation of the GCC2019. These points show that it was beneficial for Japan to host the GCC 2019. In addition, the fact that the GCC2019 was able to stimulate discussion on the research and practice of sports coaching contributed to the enhancement of Japan's international presence in the international sports coaching industry, which would be also a value of hosting the GCC2019.

Key words : coaching, conference, active learning, quantitative text analysis, co-occurrence network

キーワード：コーチング，カンファレンス，アクティブ・ラーニング，計量テキスト分析，共起ネットワーク

¹⁾日本スポーツ振興センター，²⁾国立スポーツ科学センター

¹⁾ Japan Sport Council, ²⁾ Japan Institute of Sports Sciences

E-mail : jun.kubota@jpnssport.go.jp

受付日：2020年8月17日

受理日：2021年4月6日

I. はじめに

国際コーチングエクセレンス評議会（International Council for Coaching Excellence (ICCE)）は、世界中のスポーツコーチングの発展に寄与することを目指す、非営利団体である。彼らは、2年に1度、世界中のスポーツコーチの教育や育成に携わる者、競技団体の強化活動の関係者、またコーチングの研究者やスポーツ科学者等が一同に会し、コーチングに関する課題への取り組みや新たなコーチング研究等に関する知見や知識、情報の共有、議論、意見交換を行う国際会議「グローバルコーチカンファレンス」を開催している。2019年に東京都内で開催された第12回 ICCE グローバルコーチカンファレンス（GCC2019）は、基調講演やパネルディスカッションといった全体セッション、ワークショップや研究発表による分科会で構成された。GCC2019ではまた、参加者の主体的・対話的な学びを促進するため、全体セッションの後に参加者が小グループに分けられて、各グループにファシリテーターを配置して参加者間の情報交換や意見交換を行うセッション（ラーニング・チャレンジセッション）を、これまでの ICCE グローバルコーチカンファレンスでは行われていない新たな取り組みとして実施した。我が国をはじめ、国内外のコーチ育成やコーチングの実践に関するこれまでの流れや現状を踏まえると、このような機会や設えは、我が国のコーチ育成やコーチング研究、コーチング実践の推進に寄与するとともに、国際スポーツ界への貢献につながることが期待された。そこで本研究は、GCC2019と過去の ICCE グローバルコーチカンファレンスの参加状況を比較し、また GCC2019の参加者へのアンケート調査の結果から、GCC2019開催の意義とその価値について検討した。そして、今後の中規模から大規模の会議の開催に当たっての工夫すべき点を示すことを目的とした。

II. 方法

本研究では、2015年（GCC2015）、2017年

（GCC2017）及び2019年に開催された ICCE グローバルコーチカンファレンスを分析の対象とした。各カンファレンスの際に公表された開催要項やプログラム、参加者名簿から、セッション数や演題数、参加国・地域や参加者の数を計算した。

また、GCC2019終了後、ICCE事務局から参加者に対して、カンファレンス全体への評価や参加者自身の活動に対するカンファレンスの有効性、カンファレンスの優れた点、今後の ICCE グローバルコーチカンファレンスに対する意見について回答をするオンラインアンケート調査への協力がメールで依頼された。回答者は、匿名で、自由意思のもとで回答を行った。ICCE事務局が調査結果を集約し、共有された調査結果を本研究の分析に用いた。

カンファレンスの優れた点に関する自由記述回答に対して、KH Coder 3²⁾³⁾を用いた計量テキスト分析^{註1)}を実施した。計量テキスト分析の前処理として、抽出語のうち、セッションのタイトルである「Working Style and Approach」、「Challenges in Different Cultures」、「Martial Arts and Coaching」、「COACHING: In theory practice is simple, but is it simple to practice theory: an autobiographical experiment」、「Artistic Performance and Excellence」、「Learning challenge」やセッションの枠組みを示す「Plenary session」、「Poster session」、「Breakout session」、そしてコーチを育成する者を指す「Coach developer」、「Coach educator」は、他の語と区別して語同士の関係性を検討するために、強制抽出した。また、「opportunity」を名詞表記に統一した。その後、形態素解析を行い、自由記述回答から抽出される語の延べ数を示す総抽出語や、何種類の語が含まれているかを示す異なり語の語数とともに、出現頻度の上位にある語を確認した。

次に、頻出語の最小出現数を3回に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては、描画数を60に設定して、関連が特に強い語同士を線で結んだ共起ネットワーク^{註2)}を作成した。本研究では、「中心性（媒介）」^{註3)}のネットワーク図から媒介中心性の高い語を確認するとともに、「サブ

グラフ検出 (modularity)」^{注4)} のネットワーク図にて確認される語同士の関係性から、カンファレンスの優れた点に関する自由記述回答の構造を解釈した^{注5)}。

Ⅲ. 結果・考察

1. 過去のグローバルコーチカンファレンスとの比較からみる GCC2019

Table 1 は、GCC2015 から GCC2019 の開催概要をまとめたものである。GCC2015 及び GCC2017 は、いずれもヨーロッパの都市での開催であったが、GCC2019 は、2007 年に北京で開催されて以来、2 度目のアジアでの開催となった。参加者数は、GCC2015 の 381 名、GCC2017 の 370 名と比べて、GCC2019 は 460 名と大きく増加した。なお、2007 年に北京で開催されたアジア初の ICCE グローバルコーチカンファレンスの参加者数は、約 300 名であった^{注6)} ため、GCC2019 は、アジアで開催された ICCE グローバルコーチカンファレンスで最多の参加者数となった。

参加国・地域数もまた、GCC2015 が 27 개국・地域、GCC2017 が 32 개국・地域であったが、

GCC2019 は 39 개국・地域となった。特に、アジアとオセアニアからの参加国・地域数が増加した (Figure 1)。GCC2015 及び GCC2017 には参加者がおらず、GCC2019 には参加者がいた国・地域は、韓国、カンボジア、クウェート、香港、インドネシア、ソロモン諸島、パプアニューギニア、フィジーであり、すべてアジア及びオセアニアの国・地域であった。ヨーロッパ圏の都市で開催されることの多い ICCE グローバルコーチカンファレンスであるが、GCC2019 の日本開催が決定した後、日本国内の人々だけでなく、アジア及びオセアニアの人々に対しても、スポーツコーチングに関する学術面や実践面からの国際的な議論に参加し、それぞれの日々の活動に活かしてもらうための機会を提供するため、スポーツ・フォー・トゥモロープログラム^{注7)} やアジアスポーツ強化拠点連合 (Association of Sports Institutes in Asia)^{注8)} のネットワークを通じて、アジア及びオセアニアのスポーツ関係団体に対して、GCC2019 の日本開催の周知を図り、参加を呼びかけた。その結果、近年の ICCE グローバルコーチカンファレンスに参加していない国・地域からの多くの参加につな

Table 1. Summary of the 10th, 11th, and 12th ICCE Global Coach Conferences

		GCC2015	GCC2017	GCC2019
開催国・都市		フィンランド・ヴィエルマキ	英国・リバプール	日本・東京
テーマ		Coach and Athlete Empowerment: A Winning Combination	Challenging Sport Coaching Frontiers: The Role of Sports Science and Technology	Coaching: the Cornerstone of Education, Excellence, Equity, Ethics in Sport
参加者数		381	370	460
参加国・地域数		27	32	39
全体セッション数		7	5	6
シンポジウム・ワークショップ数		14	18	13
研究発表数	口頭	90	151	137
	ポスター	29	25	33
	合計	119	176	170

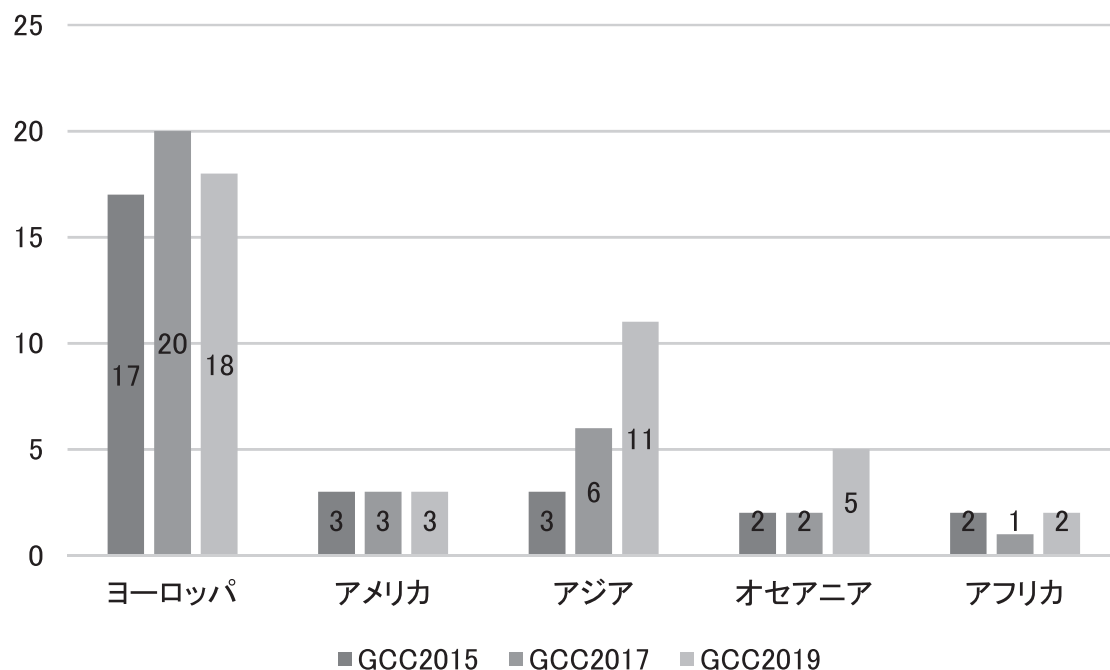


Figure 1. Number of participating countries by region for each conference

がったものと思われる。また、開発途上国からの参加者の GCC2019 参加費を割り引いて設定したことも、アジア及びオセアニアからの参加者の増加につながったものと思われる。

GCC2019 の研究発表数は、口頭発表が 137 演題、ポスター発表が 33 演題で、合計 170 演題となった。GCC2017 と比べて、口頭発表が 14 演題減少したものの、ポスター発表が 8 演題増加し、2 回連続で 170 演題以上の研究発表数となった。

2. 参加者に対するアンケート調査の結果からみる GCC2019

GCC2019 終了後に実施されたオンラインアンケート調査には、100 名から回答が得られた（回収率 21.7%）。なお、そのうち 58 名が、GCC2019 が ICCE グローバルコーチカンファレンスに初めて参加する機会になったと回答した。

GCC2019 全体の評価について、「優れている」または「少し優れている」と回答した者は 80 名（80.0%）であり（Figure 2）、参加者自身の活動に

対する GCC2019 の有効性について、「非常に有効であった」または「少し有効であった」と回答した者は 76 名（76.0%）であった（Figure 3）。

GCC2019 の優れた点に関する自由記述回答について、90 名からの回答を得た。形態素解析の結果、総抽出語は 1,420 語、異なり語は 433 語が抽出された。出現数上位 150 語は、Table 2 のとおりである。「opportunity」が 17 回と最も多く、次いで「good (16 回)」、「presentation (13 回)」、「group (11 回)」、「networking (11 回)」、「people (11 回)」、「research (10 回)」となった。

共起ネットワークの中心性（媒介）は、Figure 4 のとおりである。媒介中心性の高い語として、「idea」、「venue」、「way」が認められた。媒介中心性が最も高かった「idea」に着目すると、「discuss」や「excellent」、「share」が「idea」の前に接続するかたちでの結びつきが認められた。GCC2019 が優れたアイデアの議論や共有の場になっていたものと思われる。また、会場、開催方法についても、GCC2019 の評価において参加者

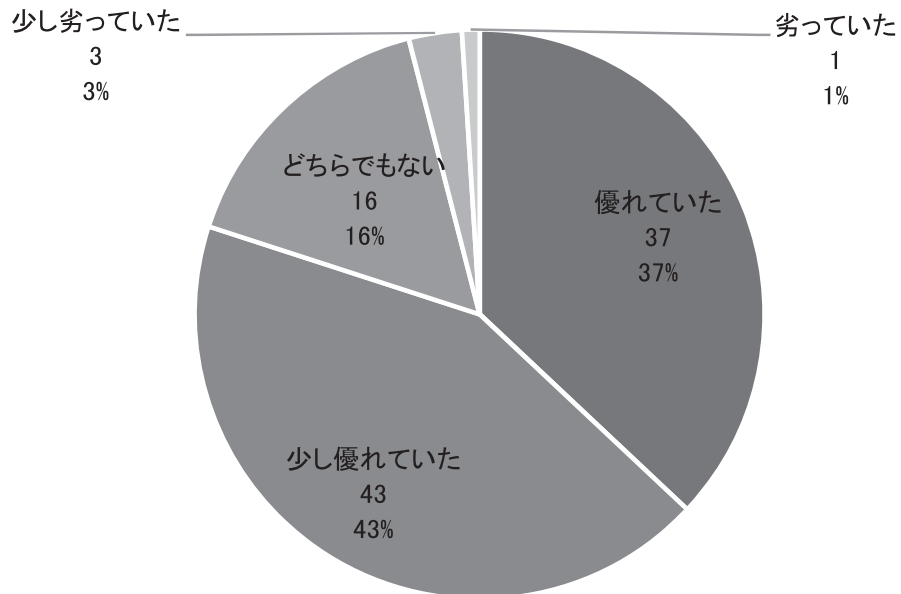


Figure 2. Overall evaluation of the 12th ICCE Global Coach Conference in the questionnaire survey

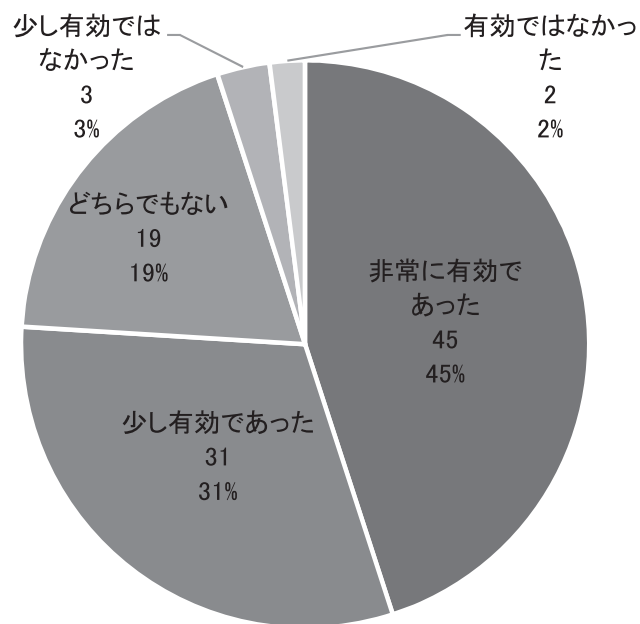


Figure 3. Meaningfulness of the 12th ICCE Global Coach Conference on participants' activities

の関心が高かったものと思われる。

共起ネットワークのサブグラフ検出 (modularity) では、8 語以上の 3 つの大きなサブグラフを含む 9 つのサブグラフが認められた (Figure 5)。

大きなサブグラフの 1 つ目は、「idea」を中心に、「session」や「new」、「interesting」、「excellent」、「discuss」、「keynote」等の 12 語の共起関係が認められた。2 つ目は、「research」や「researcher」、

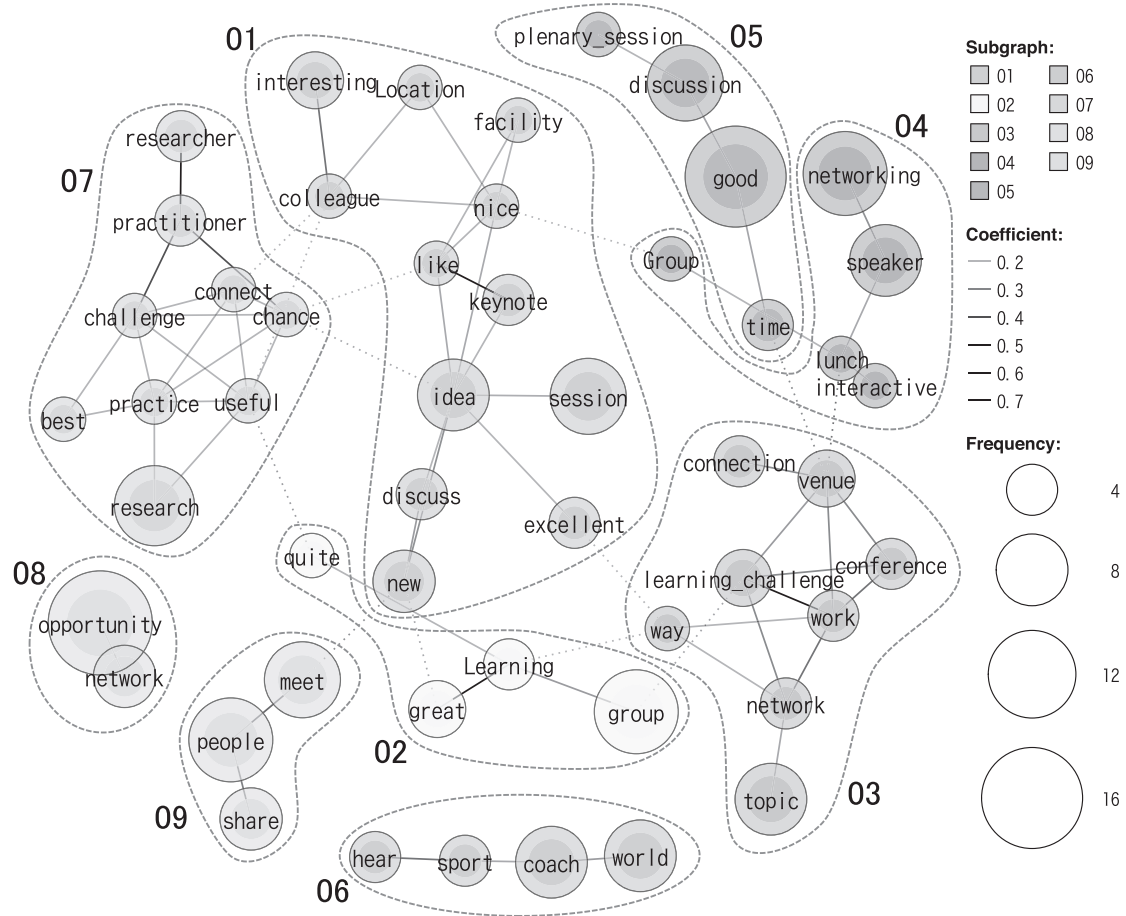


Figure 5. Modularity co-occurrence network of open-ended question's responses on the positive aspects of the 12th ICCE Global Coach Conference

「practitioner」等の9語の共起関係が認められた。3つ目は、「network」や「topic」、「venue」、「Learning_challenge」、「work」等の8語の共起関係が認められた。その他、「group」や「great」、「learning」、「quite」の4語、「group」や「networking」、「speaker」、「interactive」、「lunch」の5語、「good」や「discussion」、「time」、「Plenary session」の4語、「world」や「coach」、「sport」、「hear」の4語、「opportunity」と「network」に2語、「people」や「meet」、「share」の3語の共起関係が認められた。

頻出する形容詞と副詞に着目すると、「good」や「new」、「different」、「great」、「interesting」、「excellent」という語が認められた。共起ネット

ワークから、「good」は「discussion」と、「new」は「discussion」と、「great」は「learning」と、「interesting」は「colleague」と、「excellent」は「idea」との結びつきが認められた。このことから、GCC2019での議論や情報交換、学び合いの場の設えが評価されたものと思われる。ラーニング・チャレンジセッションでは、参加者が事前に登録した自身の役職と使用言語に基づいて、参加者が10名から15名の小グループに分けられ、また各グループに、国内外でコーチディベロッパー^{注9)}の教育やトレーニングを受けた者がファシリテーターとして配置され、全体セッション終了後に、全体セッションの内容をもとに小グループ内

で情報交換や意見交換が30分行われた。これは、ニュージーランドのスポーツ統括団体であるスポーツ・ニュージーランド (Sport New Zealand) が、2015年12月に開催したコーチングに関する会議「Connecting Coaches 2015 – Coaching the New Zealand Way」の際、参加者が単に大量の情報を受け取る機会ではなく、真の学習機会とすることを目指して導入した設え¹⁾を参考にした。近年では、国内においても、成人教育の観点から、参加者が自主的に学ぶアクティブ・ラーニングの仕組みを取り入れて企画・開催された学術会議もある⁴⁾。ICCE グローバルコーチカンファレンスでは、参加者の主体的・対話的で深い学びを促すことを目的として、初めてこのセッションを設けることができたが、参加者に対して新たな学びの機会を提供できたことが、評価につながったものと思われる。また、GCC2019を通じて優れたアイデアに触れたことや、研究者や実務者が課題や成功事例に関して共有する機会やつながりを持てたことが評価されたものと想定される語群が共起ネットワークにおいて認められたことから、

ラーニング・チャレンジセッションをはじめ、一般研究発表やワークショップが行われた分科会、さらには昼食時にも、登壇者や話者による一方向の発表ではなく、参加者間での双方向型の積極的な情報交換や意見交換が行われたことが示唆された。このことから、参加者に対して主体的・対話的な学びの機会を提供できたことが、評価につながったものと思われる。

また、今後のICCE グローバルコーチカンファレンスに対する意見に関する自由記述回答について、74名からの回答を得た。形態素解析の結果、総抽出語は2,507語、異なり語は620語が抽出された。出現数上位150語は、Table 3のとおりである。「presentation」が39回と最も多く、次いで「day (34回)」、「session (29回)」、「conference (28回)」、「research (20回)」となった。

共起ネットワークの中心性(媒介)は、Figure 6のとおりである。媒介中心性の高い語として、「thing」、「want」が認められた。

共起ネットワークのサブグラフ検出(modularity)では、11語以上の3つの大きなサブグラフを

Table 3. Frequent words in open-ended question's responses regarding suggestions for future ICCE Global Coach Conferences

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
presentation	39	good	7	lot	5	nice	4
day	34	information	7	minute	5	opportunity	4
session	29	make	7	parallel	5	participant	4
conference	28	think	7	practical	5	physical	4
research	20	topic	7	allow	4	possible	4
coach	16	way	7	breakout	4	practice	4
time	12	better	6	coach_developer	4	researcher	4
attend	11	different	6	continue	4	spread	4
keynote	9	mean	6	disappointing	4	work	4
present	9	sport	6	ICCE	4	abstract	3
great	8	want	6	idea	4	attendee	3
presenter	8	workshop	6	level	4	better	3
athlete	7	able	5	like	4	book	3
coaching	7	education	5	maybe	4	clash	3
discussion	7	group	5	money	4	clash	3

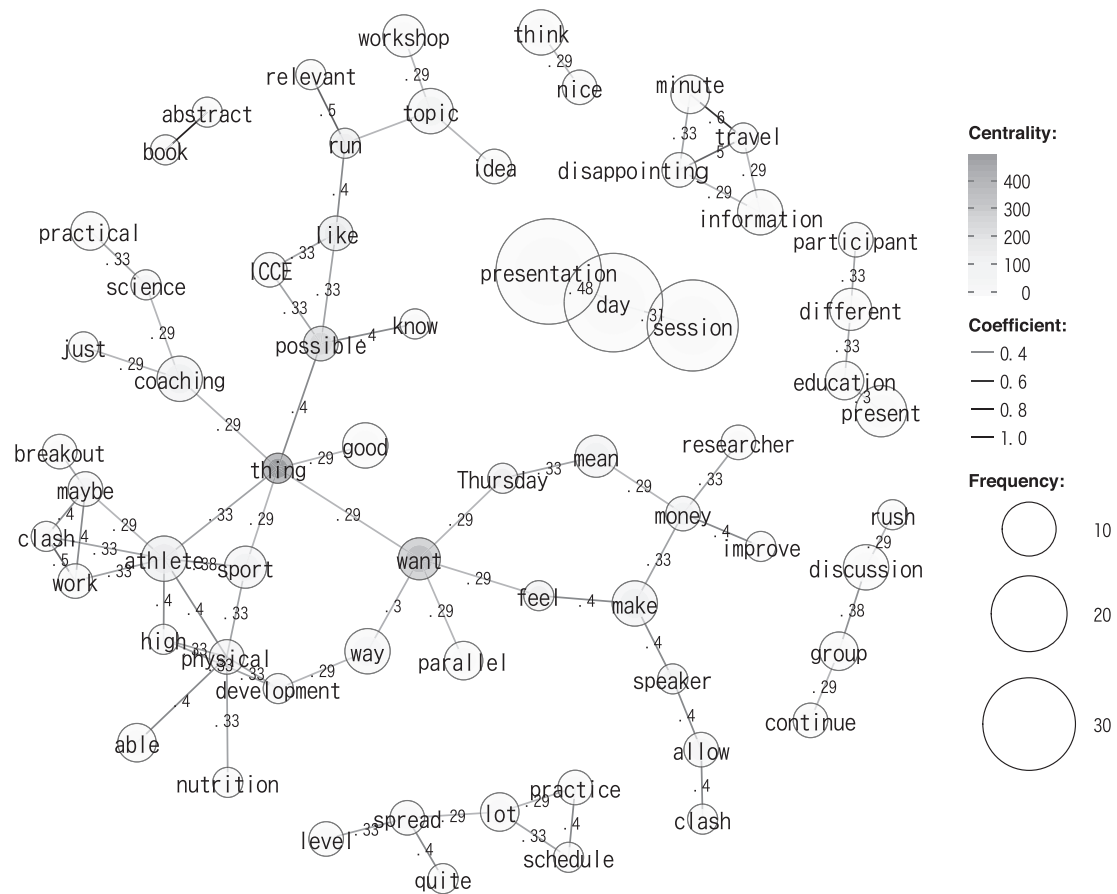


Figure 6. Centrality co-occurrence network of suggestions for future ICCE Global Coach Conferences

含む 10 のサブグラフが認められた (Figure 7)。大きなサブグラフの 1 つ目は、「thing」を中心に、「coaching」や「good」、「possible」等の 15 語の共起関係が認められた。2 つ目は、「want」を中心に、「parallel」、「Thursday」、「way」等の 13 語の共起関係が認められた。3 つ目は、「athlete」や「sport」、「clash」等の 11 語の共起関係が認められた。その他、「practice」や「schedule」、「lot」、「spread」、「level」、「quite」の 6 語、「think」と「nice」の 2 語、「present」や「different」、「education」、「participant」の 4 語、「presentation」や「day」、「session」の 3 語、「information」や「minute」、「disappointing」、「travel」の 4 語、「abstract」と「book」の 2 語の共起関係が認められた。

これらの共起関係において、分科会の構成やス

スケジュールについての意見に関するものが複数認められた。GCC2015では最大8つ、GCC2017では最大9つの一般研究発表やワークショップによる分科会が同時時間帯に行われた。この構成を踏襲するかたちで、GCC2019では最大12の分科会が行われた。参加者からは、分科会を複数日に分けての実施など、より多くの分科会に参加できるような構成を求める意見が多く見られた。このことは、ICCE事務局にとって、今後のICCEグローバルコーチカンファレンスのプログラム構成やスケジュールを検討する上での有益な示唆であると思われる。

IV. 総合考察

本研究の結果、GCC2019 と過去の ICCE グロー

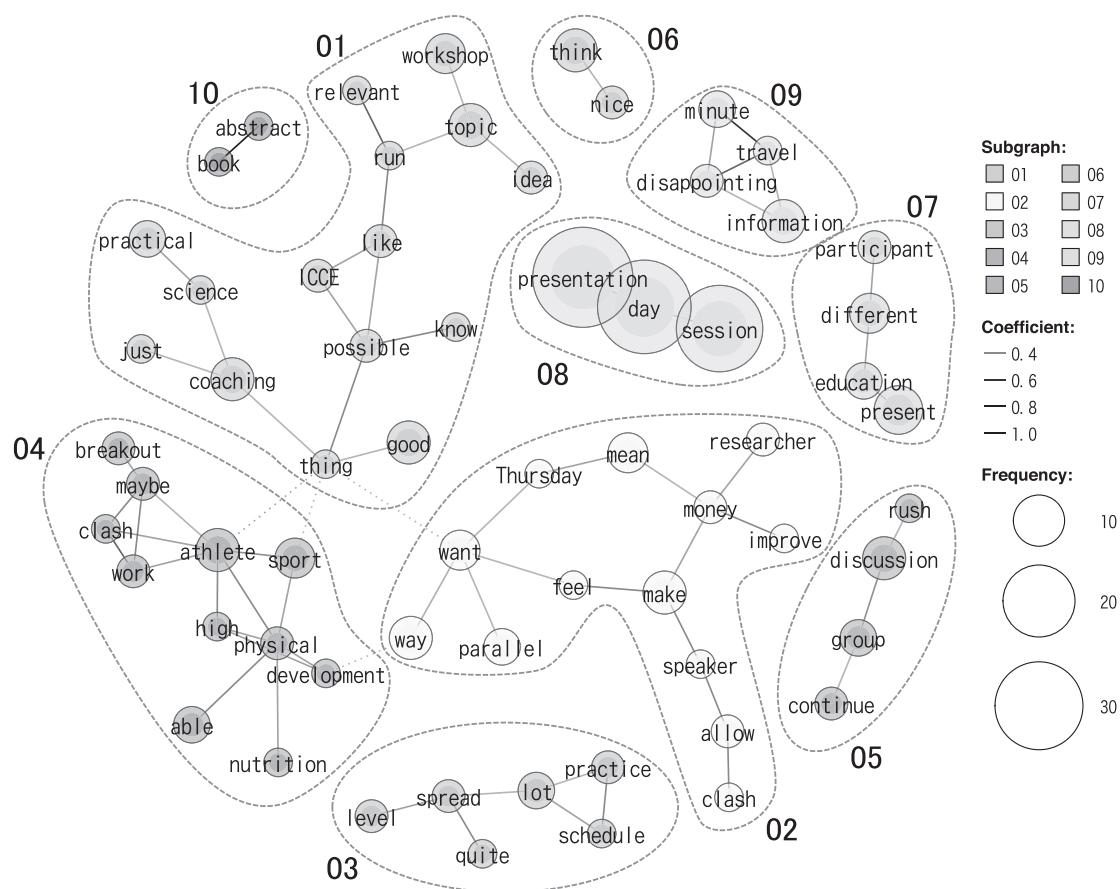


Figure 7. Modularity co-occurrence network of suggestions for future ICCE Global Coach Conferences

バルコーチカンファレンスの参加状況を比較し、GCC2019では、特に日本をはじめ、アジア及びオセアニアの多くの国々の人々に対して、スポーツコーチングに関する情報交換や意見交換の国際的な機会を提供することができたことが示唆された。また、計量テキスト分析の手法を用いて示されたGCC2019の参加者へのアンケート調査の結果から、参加者に対して主体的・対話的な学びの機会を提供できたことが、GCC2019の評価につながったことが示唆された。これらのことは、我が国においてGCC2019を開催したことの意義と言える。また、GCC2019の開催を通じて、スポーツコーチングの研究や実践に関する議論を後押しし、参加者から評価を得られたことは、国際的なスポーツコーチング界の関係者における我が国の

国際的な地位の向上にも寄与するものと思われ、GCC2019を開催したことの価値と言える。

一方で、国内のスポーツコーチングの関係者に対するGCC2019開催の価値や意義については、さらなる分析が必要である。アンケート調査の回収率が21.7%となったことや回答者の半数以上がICCEグローバルコーチカンファレンスに初めて参加した者であったことが、今回の分析結果に影響を及ぼしている可能性がある。また、例えば、GCC2019でどのような知識や情報、ネットワークが得られたか、得られた知識や情報、ネットワークがGCC2019後にどのように活かされているか等に関する調査や分析を行うことで、GCC2019が参加者にとって主体的・対話的な学びの機会として機能したかを深く検討することができるもの

と思われる。さらに、本研究では、アンケート調査の結果を、ICCE グローバルコーチカンファレンスの参加経験の有無による違いや国内参加者と海外参加者との間での違いについて検討を行わなかったが、回答者をこのように区分けをして分析を深めることで、GCC2019 開催の価値や意義についてさらなる示唆が得られるものと思われる。

今回の GCC2019 の開催を通して得られた知見から、今後の中規模から大規模の会議の開催に当たっての工夫すべき点として、以下のことが示唆された。GCC2019 の優れた点に関するアンケート調査の結果から、GCC2019 がアイデアの議論や共有の場になっていたこと、また GCC2019 における議論や情報交換、学び合いの場の設けが評価されたが、大規模な会議では、小グループでの意見交換やネットワーキングの機会が重要になる、ということである。会議を開催する施設の部屋数や収容人数にも限りがあり、また新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への感染リスクの高い状況で大人数が集まる集合型の会議の開催が困難な場合もある。その際、例えば、オンライン会議システムを活用しながら、小グループに分かれての議論や意見交換を行うことも、参加者にとって有益な会議を開催することにつながる可能性がある。また、GCC2019 の会場や開催方法についても参加者の関心が高かったことから、会議の開催場所や立地、会場、会議で扱われる情報や知識、知見、アイデア、会議を開催・進行する方法や各セッションの構成が有益な会議の主要な要因である、ということであり、十分工夫する必要がある。そして、本研究を通じて、GCC2019 は、スポーツコーチングの研究や実践に関する参加者の議論を後押しし、国際的なスポーツコーチング界の関係者における日本の国際的地域の向上に寄与する機会となったことが示唆されたが、スポーツコーチングに限らず、スポーツに係る国際会議を積極的に招致・開催することで、我が国の国際的地位の向上に貢献できる機会とすることができると言え、また、その機会を地域につなげるこ

も視野に置く必要がある、ということである。第2期スポーツ基本計画では、今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策の柱として、「スポーツを通じた活力があり絆の強い社会の実現」が示されている。この中での具体的な施策として、「国は、国際競技大会や国際会議等のスポーツ MICE^{注10)}の積極的な招致、開催を支援することにより、国際的地位の向上及び地域スポーツ・経済の活性化を推進する」とされている⁹⁾。これを踏まえると、地域スポーツの活性化やスポーツを通じた地域の活性化の観点では、例えば、GCC2019 に参加した海外の著名なコーチやコーチング研究者を地域に派遣することができれば、コーチングに関する知識や技術の共有等の取り組みを通じて、地域スポーツのさらなる推進に寄与できた可能性がある。

謝辞

本研究に協力いただいた、国際コーチングエクセレンス評議会（International Council for Coaching Excellence (ICCE)）の John Bales 会長、Ladislav Petrovic 事務局長、Karen Livingstone 事務局員に深く感謝の意を表します。

注

注1) 計量テキスト分析とは、構造化されていない質的なデータの中でも特に文字データを分析する方法であり、データの中から自動的に言葉を取り出し、さまざまな統計手法を用いて探索的な分析を行うことが可能となる²⁾。

注2) 共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークである。円は語を表し、語の出現数（Frequency）に応じて、円の大きさが変化する。また、円と円を結ぶ線が共起関係を表し、共起の程度（Co-efficient）に応じて、線の太さが変化する³⁾。

注3) 「中心性（媒介）」では、それぞれの語が示されたネットワーク図の全体の中で、どの程度中心的な役割を担っているかが、色の違いで示

される。

注4)「サブグラフ検出(modularity)」では、強く互いに結びついている語が自動的に検出され、色分けされる。

注5) この分析や解釈においては、それぞれの語が他のどの語とともに用いられているか、どのような文脈で用いられているかを確認するため、KH Coder の KWIC コンゴダンス及びコロケーション統計の機能を用いた。

注6) ICCE 事務局長からのヒアリングで得られた情報による。

注7) 国が推進するスポーツを通じた国際貢献事業で、世界のよりよい未来をめざし、スポーツの価値を伝え、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントをあらゆる世代の人々に広げていく取り組み。

注8) 日本スポーツ振興センターが加盟している、アジアの国・地域のスポーツ強化拠点で構成する連合組織。

注9) ICCE は、コーチディベロッパーを、コーチの教育やコーチの学習の促進、コーチへの助言、コーチの評価に関するトレーニングを受けた者として、コーチを育成する上で重要な人材と定義している。

注10) 日本政府観光局によると、MICE とは、企業等の会議(Meeting)、企業等の行う報奨・研修旅行(インセンティブ旅行(Incentive

Travel))、国際機関・団体、学会等が行う国際会議(Convention)、展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)の頭文字を使った造語であり、これらのビジネスイベントの総称である。

文献

- 1) Eade A, Edwards J. Connecting Coaches 2015 — Coaching the New Zealand Way Reflections on Designing a Coach Learning Convention. Int Sport Coach J, 3(3): 303-306, 2016.
- 2) 樋口耕一. 内容分析から計量テキスト分析へ——継承と発展を目指して. 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. 第二版, ナカニシヤ出版, pp.1-2, 2020.
- 3) 樋口耕一. 資料 A KH Coder 3 リファレンスマニュアル. 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. 第二版, ナカニシヤ出版, pp.182-189, 2020.
- 4) 川村和美, 大澤匡弘. 参加者を主役にする年会設計・運営とは ~アクティブラーニングのススメ~. Yakugaku Zasshi, 138(4): 521, 2018.
- 5) スポーツ庁. スポーツ基本計画. https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf (2020年7月7日)